

中国に迫る危機



香港上海銀行(中央) と長崎ホテル
(長崎大学附属図書館所蔵)



大北電信が建設した海底ケーブル陸揚庫(長崎市小ヶ倉)
手前：1871年(明治4) 海底電線が揚げられたとき使用された電信機

■ 上海という街

中国の一交易港に過ぎなかった上海という街が世界史に登場するようになるのは、1842年にイギリスと清国で結ばれたアヘン戦争の講和条約(南京条約)以降のことです。この後イギリス、フランスなどの租界が形成され、西洋商館が立ち並んで繁栄しているかにみえました。しかし、上海は中国にあって中国人のものでない都市となったのです。1862年(文久2)に幕府が長崎から派遣した千歳丸(せんざいまる)で上海を訪れた長州藩の高杉晋作らは、こうした状況に強い危機感を抱いて帰国しました。

■ 上海と長崎

長崎と上海は、海外交易のために開かれた港という非常に良く似た生い立ちを持っており、つながりも深い町です。1871年(明治4)デンマークの大北電信会社は、長崎-上海間、長崎-ウラジオストック間に通信ケーブルを敷設しました。長崎の松が枝に現在も残る旧香港上海銀行長崎支店の建物(国重要文化財)は、1904年(明治37)に完成したものです。なかでも最も長崎と上海を緊密に結びつけたのは、横浜から神戸、長崎を経由した上海航路でした。当初アメリカのパシフィック・メール社が運航していましたが、1875年(明治8)岩崎弥太郎が率いる郵便汽船三菱会社がそれにとって代わりました。

■ 欧米列強からのアジアの解放

18世紀後半に産業革命が始まり、蒸気機関など圧倒的な技術力と軍事力を背景に欧米列強は、アフリカやアジアの国々を植民地化していきます。屈辱的な支配に怒った人々の中には、母国を脱出・留学して高い教養と理性を身につけ、自らの手で民族を救うために活動する者もいました。そうしたなか、アジアで唯一近代産業を興して西洋に追いつきつつある日本に対して、民族自立運動への協力が期待されていました。